

Sairai Sanya Arts Festival



再来



令和7年度台東区芸術文化支援制度
Sairai Sanya Arts Festival

観覧料: 500円 (グッズ付、近隣にお住いの方無料)

再来さんや芸術祭実施レポート

1. 実施概要

「再来さんや芸術祭」は、東京台東区・荒川区を横断した旧山谷地区を舞台に、地域の歴史・記憶・人々の声に耳を澄ませながら、新たな芸術表現の可能性を探るアートプロジェクトである。2025年のテーマは「Let the Whispers Lead — ささやきに導かれるままに」。再開発が進み、かつて日雇い労働者やアウトサイダーたちが生きてきた山谷の記憶が薄れつつある中で、埋もれてしまった「微かな声(Whispers)」をどのようにすくい取り、現代の生活者へつなぐことができるかを問い合わせ表現で、地域の中を行った。

本芸術祭では、アーティストを公募し、レジデンスを通してより地域のアリーティに根ざし、パフォーマンス、映像上映、ワークショップ、まち歩きツアー、地域住民との交流会など、多様な企画を展開した。

「再来さんや」という名称には、“もう一度この地を訪れ、再び誰かと出会う場所”*という願いが込められている。訪れる人、暮らす人、アーティストが交わることで、小さくとも温かなつながりが生まれ、「大きな物語では語られない個人の声」に光が当たる場を目指している。



鑑賞者からコメントをいただいた

2. 開催概要

タイトル	:再来さんや芸術祭2025
主 催	:さんや駄々
開催日時	:2025年10月10日(金)~2025年10月13日(月・祝) 再来ビデオ:10月10日(金)~10月13日(月・祝)17:00~19:00 (10月11日は悪天候のため中止)
会 場	作品展示・ワークショップ:10月11日(土)~10月13日(月・祝)11:00~17:00
鑑 賞 料	:旧山谷地区(玉姫公園、ホテル寿陽、泪橋ホール、さんやカフェ 等)
来場数	:500円(近隣無料) :延べ来場数240人

3. 団体紹介



さんや駄々(3ducksDADA)は芸大美大出身者によって有志で組織され、東京のヘテロトピア(既存の社会秩序とは異なる価値観や規範が存在する場所)一山谷エリアを拠点に、「地域・社会構築」のテーマに関心を持つ日本の新進作家と海外の若手作家を繋ぎ、異なる文化的背景を持つ人々の視点から現代都市の新たな可能性を観察・探求している。芸術創造と社会調査を組み合わせたアートプロジェクトを企画・実施するアートコミュニティです。

「地域・社会構築」をテーマに掲げ、日本の新進作家と海外の若手作家を結びつけ、現代都市の可能性を様々な視点から探求しています。東京の山谷エリアを拠点にし、芸術創造と社会調査を組み合わせたアートプロジェクトを展開しています。私たちは芸大美大出身者から始まり、外国人アーティストや研究者で組織され、「再来さんや」を企画・運営しています。その活動の目的は、現代社会の課題に直面するコミュニティの経験とエンパワーメントに焦点を当て、彼らの視点や物語を表現する場所と機会を提供しています。また、共同創作を通じて社会的不平等に対する理解を促進しています。

4. 再来さんや芸術祭の構成

- ①レジデンス滞在制作発表:22組の応募アーティストから4組を選出、招聘アーティスト1名を加え、山谷地区でリサーチと調査を実施。会期中、各アーティストがレジデンスでのリサーチに基づき作品を制作し、発表を行った。
- ②再来ビデオ映像上映:応募作品35部から12部(未上映1部を含む)を選定し、玉姫公園と泪橋ホールで上映を実施。
- ③地域コラボ協力施設との共同リサーチや制作活動を通して、地域と連携した企画を展開。

5. 作品紹介

◦「山谷でまた出会う散歩会」松橋萌

山谷の最古の簡易宿泊所「ドヤ」を訪ね、地域の記憶と現在を辿るツアーを行う。道中では芸術祭の展示やパフォーマンスとも出会えるほか、長年ドヤに暮らす人々との交流会も企画している。タイトル「また出会う」には、この街で交わされた「またね」という言葉のように、人々のつながりを散歩を通して紡ぎたいという想いが込められている。



◦「今、あなたと私は路上にいる 山谷で合流するワークショップ2025」コロラド(桑嶋 燐+岡田夏旺)

「私はこんな総理大臣が欲しい」をテーマに、参加者が思い思いの言葉を綴るアートワークショップである。ゾーイ・レナードの詩《I Want a President》(1992)を2025年の山谷で再制作する。制作は玉姫公園を行い、完成作品は泪橋交差点に展示。あわせて、参加者が手を繋いで撮影した写真を玉姫公園のフェンスに並べ、人と人のつながりを可視化する。



◦「さんや百物語」橋本美和子

山谷に居住する方、地域で働く方、芸術祭来訪者が入り混じり、円座になって「百物語」を行う。「百物語」は元来、怪談を語り合い100話に至ると本当の怪異が現れる、というものだが、今回は怪談ではなく、参加者自身の好きなことや経験について短く語ってもらう。会期中に100の物語が集まったとき、そこからどんな新しい景色が立ち上がるのかを探す。



◦「家屋舍谷2025」尹苑

家・屋・舍・谷は、一見それぞれ異なる漢字と意味を持つが、いずれも同じ「や」と読む。本作品は、祈りを象徴する絵馬の形と家の形を重ね、「祈る」という行為をテーマとした山谷地域におけるサイトスペシフィックなパフォーマンスである。絵馬が並ぶことで集落のような地形が立ち上がり、2024年の再来さんやで初演した二日間のパフォーマンス《家屋舍谷》をもとに、今年はみんなの願いを集めながら形を変え、場を成長させていく。



◎「Anti-photography」Vien Valencia

山谷地区で、マニラと東京の人々の身分証写真を素材に、アイデンティティと場所の関係を問う。写真の断片を地域に再配置し、表象や意味を不安定にすることで、見る行為や帰属の権力構造を揺さぶる。居場所を奪われた人々と空間の関係を見つめ直す試み。

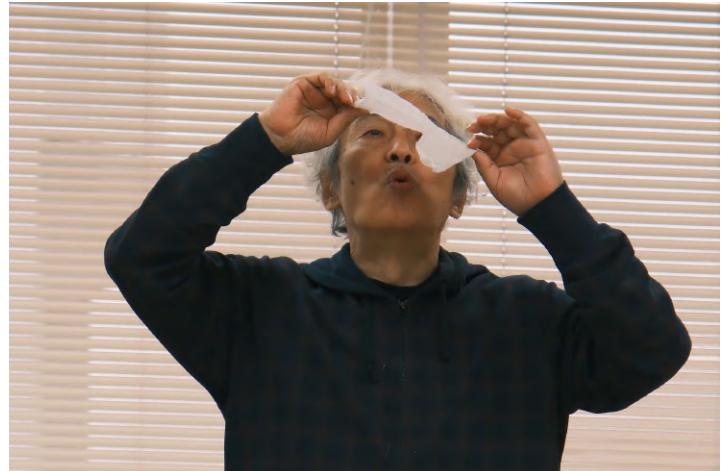


◎「山谷 ヤマの男」多田裕美子

『山谷 ヤマの男』は、写真家・多田裕美子が東京・山谷の玉姫公園で開いた青空写真館を通じて出会った男たちや、両親が営んだ食堂に集った人々を記録したフォト&エッセイ集である。今回の展示では1999年から2年間で撮影した120人の男たちの姿から数枚を選んで、当時の光と現在の風景を重ね合わせ、日雇い労働者の記憶と現実を再考する。



◎「パーフォマンスワークショップ」霜田誠二



◎「特別コラボ1」芝浦工業大学 システム理工学部 環境システム学科

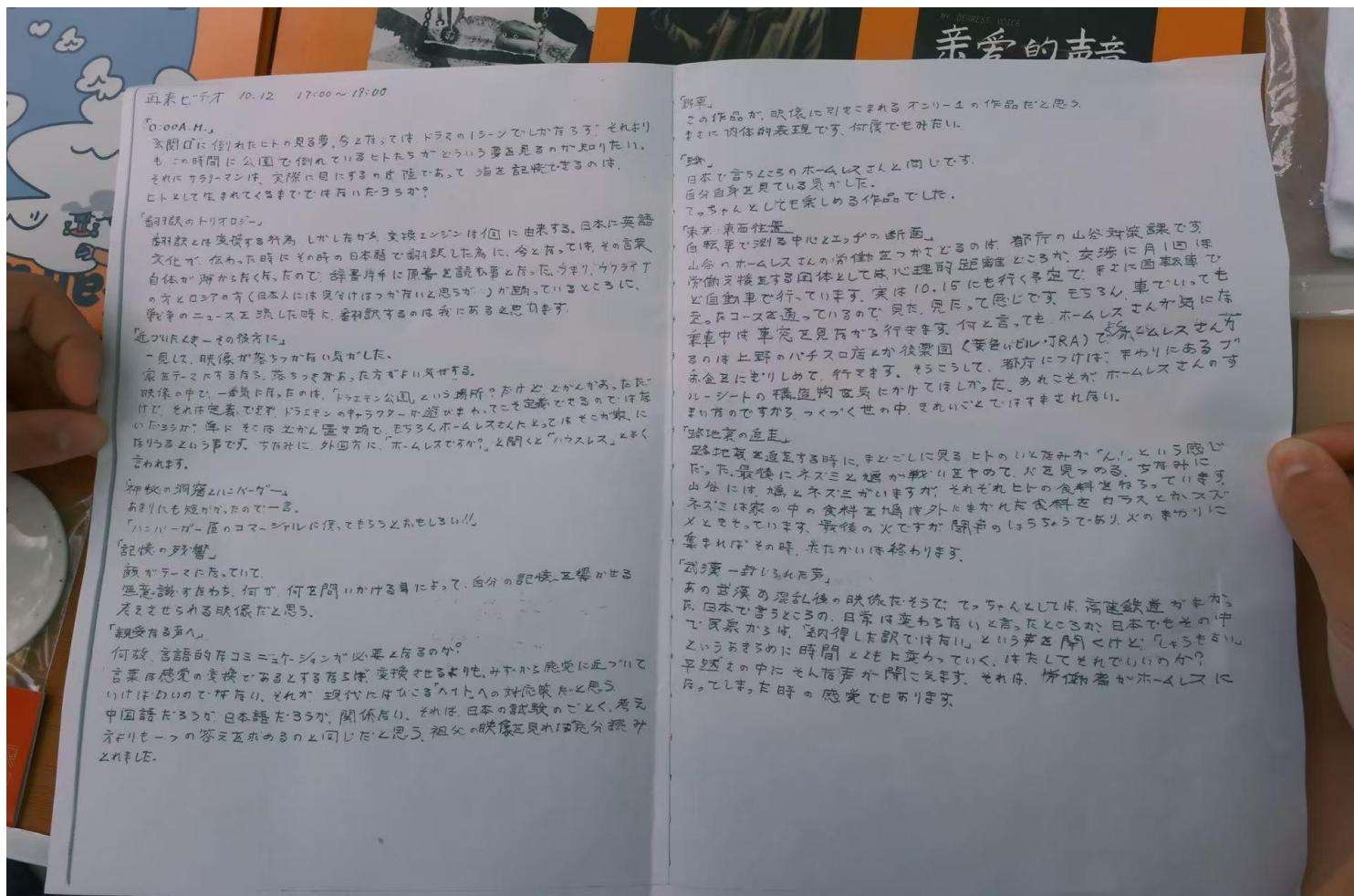


◎「特別コラボ2-未来への筆跡:山谷60年の画廊」 山岡稔



◎ 再来ビデオ

↓再来ビデオ鑑賞後感想



6. 評価／所感

- ・今回の実施では山谷地区で活動している方から協力を受け、より深く地域と信頼関係ができた。
- ・参加型プログラムの企画を重視し、ワークショップや散歩会など体験型企画は、参加者の満足度が高く、地域理解の促進に寄与した。
- ・古い宿泊所、商店、公園など、日常風景を文化資源として再認識する機会となった。地域資源の再発見に繋げた。
- ・アート関係者だけでなく研究者・地域外の市民の来場が見られた。福祉組織や医療研究機関の来場につながり、今後の協働可能性が広がった。
- ・11本の短編映像を通じ、国籍・地域を越えた共通の社会課題への気づきが得られた。

7. 課題/改善点

- ・11日の雨天により屋外プログラムが中止となり、代替案や周知体制の準備が十分でなかった。
- ・芝浦工大の学生との協働機会を設けたが、交流が限定的で、学び合いや相互作用が十分に生まれなかつた。
- ・準備・当日運営・広報・報告業務が少人数に集中し、負担が大きかった。
- ・複数会場のため来場者が迷いやすく、会場リスト化・案内表示の更なる改善が必要。
- ・アーティストと地域の交流プロセスが来場者に十分伝わらず、発信の工夫が求められる。

8. 記録写真

